

研究ノート

アゾフ・ノート  
—ウクライナ戦争とパラミリタリー—

佐原 徹哉\*

**The ‘Azov’ Note: The Ukrainian War and Paramilitarism**

By TESTUYA SAHARA

Since the Russian invasion, the paramilitary militia ‘Azov’ of the National Guard of Ukraine division has drawn special attention. This article examines its organizational traits, ideologies, pre-war activities and military operations during the Russian invasion. In gathering the information, the author paid special attention to wipe out the elements of ‘Russian propaganda’ by focusing on open sources, mainly the online editions of US, Canadian, British, French, Greek, Bulgarian and Turkish news agencies. Russian news clips were carefully excluded, except for those produced by the Ukraine media or those transmitting the simple official remarks of the Putin government. The results of the analysis point to a number of conclusions. Before the war, Azov was a unique mixture of paramilitary and political movements. Its military wing formed an autonomous fighting unit composed of volunteer soldiers, both domestic and foreign, operating on its own command structure beyond the control of the government. Its political wing espoused neo-Nazi ideologies equivalent to the alt-right movements in the West and owned a political party and various social organizations. After the invasion, as its battalions played significant roles in the key battles, the military wing became one of the mainstream combatants of the Ukraine government while keeping intact the strong link with its political wing. As a result, Azov attracted a more diverse crowd and consolidated its image as ‘the patriotic defender of the nation’, despite the well-grounded accusations of persecution against the civilian population. In light of the growing dependence of the Ukraine government on Azov’s military prowess, there is serious concern that this group will gain more political momentum in the future.

ロシアによる侵略でウクライナの特殊部隊アゾフ<sup>1)</sup>の存在が注目されている。アゾフはウクライナの軍事機構に属しているが、固有の指揮命令系統を持ち、全員が志願兵で構成される部隊である。独立した軍事組織でありながら政府の庇護を受けるアゾフのような

---

\* 明治大学政治経済学部教授 (Professor, School of Political Science and Economics, Meiji University)

1) 日本のメディアは「アゾフ大隊」と呼んでいるが、この組織の本質は政治運動であり、本論ではアゾフと呼ぶことにする。興味深いことに、ウクライナの戦場の「正しい情報」を伝えるNGOを名乗る Ukrainian Struggle Centreの広報担当者も「アゾフ大隊」と言う呼び方はロシアのプロパガンダだと主張している。Crapa [2022].

グループをパラミリタリーと呼ぶが、現代の戦争ではその役割が大きくなり、市民の犠牲者が増加したり、戦争が長期化したりする主要因であると指摘されている<sup>2)</sup>。本論ではアゾフのパラミリタリーとしての特質を解明し、ウクライナ戦争の性格を理解する一助となることを目指す。

本論で利用したソースは主に新聞や雑誌の電子版だが、英語、フランス語、ギリシャ語、トルコ語、ブルガリア語のメディアを中心に収集し、ロシア語の情報はフィンランドとウクライナの通信社と新聞に限定し、「ロシアのプロパガンダ」の疑いがあるソースはロシア政府の言説を引用する場合を除いて全て排除した。

## 1. アゾフの起源

アゾフの前身となる武装集団は2014年春にウクライナ東部のマリウポリに登場した。2月下旬にキーウでユーロマイダン<sup>3)</sup>のデモ隊と治安機構の衝突によりヴィクトル・ヤヌコーヴィチ大統領が失脚したマイダン事件を契機に、ウクライナでは親露派による独立運動が内戦の様相を帯びた。キーウの新政権はウクライナ軍を補完するため義勇兵の戦闘行為を容認したので多数の民兵が結成されたが、マリウポリでも4月末に黒づくめの出立ちでナチスの鉤十字のついたヘルメットを被った70名ほどのグループが登場した。この「黒の集団」は親露派のデモ隊と市街戦を演じ、警察の庇護を受けながら数百人規模に拡大し<sup>4)</sup>、5月5日にアゾフ大隊を名乗るようになった<sup>5)</sup>。6月にはマリウポリから親露派を駆逐し、その後も、ここを拠点にウクライナ東部で戦闘を繰り広げた<sup>6)</sup>。

アゾフの母体となったのはアンドリー・ビレツキーという人物に率いられたハルキウ出身の若者たちだった<sup>7)</sup>。ビレツキーは当時34歳で、ハルキウ大学の歴史学部を卒業した後、極右団体「トライデント」Тризуб、次いで「ウクライナ社会民族党」に加わり、2005年に「ウクライナの愛国者」Патріот Україниという政党の党首となった。ビレツキーは格闘技とボクシングを習得しており、若者たちを集めて準軍事組織を結成し、「不法移民の取り締まり」や商店の襲撃を繰り返した<sup>8)</sup>。ビレツキーのグループは2005年から2010年までハルキウ知事を務めたアルセン・アヴァコフの庇護を受けており、準軍事組織の活動は警察

2) Üngör [2020].

3) ヤヌコーヴィチ政権のEU連合協定破棄に対して2013年11月にキーウの独立広場で始まった抗議活動に端を発する市民運動。親西欧派、人権派、極右民族主義などの諸潮流を含んでいた。

4) Халминен [2022].

5) Geoffroy [2022].

6) Sommerlad [2022].

7) Walker [2014].

8) Μπάκουλη [2022].

の補助業務として容認されていた。しかし、アヴァコフが辞任すると、2011年11月に警察と衝突し、翌月に逮捕され、懲役刑を受けた。ところが、マイダン事件直後の2014年2月に無罪判決を受けて釈放された<sup>9)</sup>。この間、「ウクライナの愛国者」と「社会民族党」の後継組織である「社会民族会議」Соціал-Національна Асамблеяが「右派セクター」Правий секторという政治団体の傘下に入ったことから、ビレツキーは二つのグループを率いて「黒の集団」を結成したのだった<sup>10)</sup>。アゾフにはハルキウのプロサッカーチームFCメタリストの応援団を母体とした「セクト82」Секта 82というフーリガンの集団も加わっていた。セクト82は2014年2月末にハルキウで親露派と戦う武装自警団を結成していた<sup>11)</sup>。

2014年春のウクライナ内戦ではアゾフ以外にも多数の義勇兵部隊が登場したが、9月に結ばれたミンスク合意で非正規兵を取り締まることになったため、その殆どが解散させられたり、正規軍に再編されたりしたが、アゾフだけは独立した組織として生き残った<sup>12)</sup>。アゾフが特別扱いを受けた理由は、ハルキウ時代にビレツキーの庇護者だったアヴァコフがマイダン事件後に内務大臣となり、内務省の庇護を受けたからだ。ビレツキーは釈放されるとすぐに内務省にポストを与えられ、アゾフも6月に警察のパトロール大隊となり、9月には連隊に格上され、11月には内務省所管の国家親衛隊の一部となった<sup>13)</sup>。この措置によってアゾフは軍からも警察からも圧力を受けないウクライナで唯一のパラミリタリーとなった。例えば、アゾフはキーウ郊外の機械工場の跡地に自前の訓練基地を持ち、武器の製造・修理も行っている。同様の訓練基地や新兵募集事務所は全国各地にあり、重火器や戦車まで保有する自立した軍事組織となっている<sup>14)</sup>。

## 2. シンボルとイデオロギー

アゾフは親露派との戦いで命知らずの兵士という評判を勝ち取り、大統領のペトロ・ポロシェンコが「我が国最高の戦闘員たち」と評したように、ウクライナの保守派からは規律の取れた献身的な愛国者だと見做されるようになった<sup>15)</sup>。その一方、アゾフはナチスに由来する意匠を好んで用いることも知られている。代表的なのが、「黒い太陽」を背景に、

---

9) Ibid.

10) Petik [2016].

11) Ibid.

12) Geoffroy [2022].

13) Українська правда [2019].

14) Шеремет[2015].

15) アゾフ部隊の規律は厳しく、飲酒は禁じられている。ある兵士は、酔っ払った隊員が隊長から滅多打ちにされ部隊から追い出された話を誇らしげに語った。Walker [2022].

ヴォルフスアンゲル<sup>16)</sup>をあしらった紋章だ。「黒い太陽」はナチス親衛隊のハインリヒ・ヒムラーが考案したもので、アゾフのヴォルフスアンゲルもナチス親衛隊第二師団の紋章に酷似している。

アゾフの擁護者はこうしたシンボルはナチスとは無関係であり、アゾフのヴォルフスアンゲルは、キリル文字のIとHを交差させたものでウクライナ語の「民族の理念」*Ідея Нації*の頭文字を取ったものだという<sup>17)</sup>。しかし、アゾフが掲げる「民族の理念」とは抽象的なスローガンではなく、具体的な政治目標であり、その内容は「社会民族主義」である。

アゾフの創始者であるビレツキーが標榜する「社会民族主義」とは、民族主義と社会政策と国家主義の3つを柱とするもので、それによると、ウクライナ民族とは同じ血を持つ集団であり、民族主義とはその人種的特性を保全するため人口増加と経済的繁栄を同時に達成することであり、そのために必要な社会政策とは、優れた人種的特性を備えた子供の出生率を上昇させ、それを育成できる家族を保護することであり、この政策の実現は大衆政治では不可能で、強い意志と自己犠牲精神と知性を兼ね備えた少数のエリートが大衆を導き、社会の能動的要素を増加させ、受動的で「家畜的要素」を減少させる独裁体制が必要なのだという<sup>18)</sup>。この主張はナチの人種衛生政策に酷似している。ビレツキーは「新生ウクライナは独裁体制の共和国となり、社会民族主義を採用した民主の帝国であらねばならない」<sup>19)</sup>とも語っている。

ビレツキーは、欧米のオルタ右翼の間で流布している「白人ジェノサイド」論も好んで口にする<sup>20)</sup>。例えば「世界の危機と民族の混沌」と題する2008年の論説では、グローバル化による資本主義の危機によってヨーロッパの「民族的危機」が加速している。その原因は移民の増加によるイスラム化とヨーロッパの「有色人種化」だ。経済危機によってヨーロッパには未曾有の規模の移民が押し寄せており、その結果、ヨーロッパ本来の住民とアフリカ人とムスリムという「劣等人種の移民」の「人種戦争」が勃発しているが、「ヨーロッパ人種が人種戦争に勝利するには真の民族革命の旗の下に団結しなければならない」と主張していた<sup>21)</sup>。「移民」と題した別の論考でも、移民の数が増えるとその政治的経済的文化的影響力が高まるが、ウクライナ民族の人口増加率はマイナスなので30～40年後には過

16) 狼狩り用の罠に由来するZに横線を入れた形のシンボル・マーク。ドイツ起源とされ、ナチスによって多用された。

17) Стара [2022].

18) Білецький [n.d.].

19) Іbid.

20) オルタ右翼と「白人ジェノサイド」論については筆者も以前の論考で詳しく説明した：佐原[2020]。

21) Білецький [n.d.].

半数の国民は混血になってしまい、犯罪率が上昇し、薬物中毒と失業も増加する。これを防ぐには、移民受け入れをやめ、ロシアとの国境を厳格に管理し、移民の国籍取得を禁止せねばならないと主張していた<sup>22)</sup>。この論説の結論としてビレツキーは「アジアとヨーロッパは互いに相容れない存在だ。両者は言葉や宗教や人種や文化や経済を異にしている。ウクライナはこれまで常にヨーロッパを守る盾であったが、今やウクライナ自身の防衛を懸念せねばならなくなった。我々はウクライナを防衛せねばならず、この国をアジアの肥溜めに変えてはならない」と呼びかけている。ビレツキーは「ヨーロッパを守る盾」としてのウクライナというスローガンが気に入っているようで、「我が民族の歴史的使命は生き残りのための最後の十字軍を組織して世界中の白人を率いることだ。それはセム人種が率いる劣等人種に対する十字軍である」とも述べている<sup>23)</sup>。反イスラムと反グローバリズムは、ズケテが指摘するように、オルタ右翼に共通する特徴である<sup>24)</sup>。

同種の思想はビレツキー個人だけでなく、アゾフ幹部たちに広く共有されており、ウクライナがヨーロッパをリベラリズムと同性愛者と移民から救済するための起爆剤となると公言している<sup>25)</sup>。下部構成員たちもビレツキーの「社会民族主義」に心酔しており、2014年に「ガーディアン」の記者は、彼らが「ウクライナには強力な独裁者が必要でどんなに血が流れようとも民族を統一するために権力を握るべきだと考えている。クーデタによって軍事政権を樹立して市民権を制約してでも国境を守るべきだと主張するものもいる。強力な軍事指導部を確立するために革命が必要だ」というものもいる。こうした主張は多くのメンバーに共有されている」と伝えている<sup>26)</sup>。「ウクラインスカ・プラウダ」の記者も「軍隊で愛国者が主導的な役割を演じるのを恐れてはならない。アゾフをモデルに、軍全体から最も頭脳明晰な将校と兵士を集めて戦闘能力の高い旅団を2、3個結成すべきである」と主張するアゾフのメンバーの最近の発言を紹介している<sup>27)</sup>。このように、アゾフはネオナチ思想を信奉する集団で、人種独裁国家を目指す政治団体であるのは明白だ。

アゾフは西側メディア向けにはネオナチ性を矮小化する傾向があり、2015年にアゾフ幹部のアンドレイ・デャチェンコは「USA Today」のインタビューで、ネオナチ思想を持つメンバーは1・2割に過ぎないと語っている<sup>28)</sup>。しかし、長年にわたってアゾフを取材

---

22) Ibid.

23) Sommerlad [2022].

24) Zúquete [2018].

25) Roussinos [2022].

26) Walker [2022].

27) Шеремет [2022].

28) Dorell [2015].

してきたカナダ人記者のマイケル・コルボーンは、彼らは都合の悪い質問には嘘しかつかないと指摘しているし<sup>29)</sup>、「ル・モンド」の記者が看破したように、この少数が組織の中枢を占め、人種主義を扇動し続けている<sup>30)</sup>。ロシア侵攻後、アゾフはネオナチ思想を益々隠蔽するようになったが、幹部たちの発言の端々には彼らの本音が透けて見える。例えば、2月末にロシア国民向けに出した声明の中で「アゾフは占領者が我が国を去る日までウクライナの盾であり続ける。我々は剣と盾を手にウクライナを悪と嘘の勢力から守るだけでなく、全ての文明世界を21世紀のペストから防衛している [下線部は筆者]」と述べているが<sup>31)</sup>、「21世紀のペスト」とはオルタ右翼の用語で「有色人種」の移民のことである。

### 3. アゾフの政治部門

アゾフは、2015年8月に前線から配置転換されたのを機に、政治部門の強化を進め、極右政党「ナショナル・コール」Національний корпусを2016年10月に結成した。ビレツキーは国会議員に当選し、議員は軍や警察に在籍出来ない規程により、司令官を辞任した。ウクライナ政府はこれを根拠にアゾフ連隊と政治組織としてのアゾフ運動は別のものだと主張し、内相アヴァコフはアゾフをネオナチとするのはウクライナの信用を貶める国際的陰謀だと語り<sup>32)</sup>、退役軍人相のオクサーナ・コリャダもアゾフは我が国の守護神だと発言している<sup>33)</sup>。しかし、コルボーンが指摘するように、アゾフ連隊とナショナル・コールが無関係とするのは「馬鹿げている」<sup>34)</sup>。両組織は不可分一体の関係にあり、キーウにあるアゾフの新兵募集事務所はナショナル・コールの事務所と同じ建物にあるし、アゾフ連隊は2021年8月にナショナル・コールの青年部を教練部門に組み込んでいる。ビレツキーの影響力も軍事部門に強く残っている<sup>35)</sup>。連隊の新司令官のデニス・プロコレンコと副司令官のスヴァトスラフ・パラマルはビレツキーの腹心で、ビレツキーは古参幹部たちを通じて軍事部門への指導力を維持し、定期的に部隊を視察している<sup>36)</sup>。

2019年の選挙でナショナル・コールはスヴォボダ、右派セクターなどの極右政党と共に選挙連合を結成したが2%強しか得票できずに惨敗し、議席を失った。だが、この選挙

---

29) Colborne [2021].

30) Geoffroy [2022].

31) Петренко [2022].

32) Українська правда [2019].

33) Ibid.

34) Colborne [2021].

35) Έθνος [2022.2].

36) Coutu [2022].

運動を通じてアゾフは極右運動全体に支配的影響力を確立した<sup>37)</sup>。コルボーンによると、アゾフは既に2018年段階でウクライナ最大・最強の極右運動となっていたが、選挙後は独立系の極右団体までもアゾフの意向に従うようになったという。

アゾフには世論に影響力を行使するための国会以外の回路もある。退役軍人省や愛国主義教育プログラム、そして自警団などの社会団体である<sup>38)</sup>。アゾフが結成した代表的な社会団体は、2017年に設立された「民族親衛隊」Національні дружиниである。この組織は「街頭での犯罪、麻薬密売、公共の場での飲酒」と戦うことを目標に掲げたNGOだが、その母体は、アゾフの退役兵とナショナル・コールの支持者である。「民族親衛隊」はウクライナ全土に13の支部を持ち、2018年1月28日に全国から集まった600人の隊員がキーウで宣誓式を行い、ナチスの突撃隊を模した服装でデモ行進して物議を醸した<sup>39)</sup>。ウクライナでは警察を補佐して市民が街頭パトロールを行うことが合法化されているが<sup>40)</sup>、「民族親衛隊」はこれを悪用して、移民やロマ<sup>41)</sup> やLGBTQ+の活動家を襲撃している<sup>42)</sup>。

ウクライナの極右は好んでテレグラムというSNSを利用するが、アゾフもテレグラムに複数の常設チャンネルを持っている<sup>43)</sup>。ナショナル・コールの公式チャンネルやビレツキー個人の公式チャンネル以外にも膨大な数のチャンネルがアゾフ傘下のグループによって開設されている<sup>44)</sup>。アゾフの映像は、画像の質も高く、編集技術も洗練されており<sup>45)</sup>、こうしたプロパガンダを通じて若いメンバーを増やし、「民族親衛隊」や自前の訓練施設を使って若者に軍事教練と思想教育を行っている<sup>46)</sup>。

このように、アゾフはネオナチ思想の信奉者たちが集結し、自前の戦闘部隊に加えて、ナショナル・コールという政党、「民族親衛隊」という社会組織、宣伝・出版等の様々な部門を備えた巨大なパラミリタリー組織であると結論できる。

#### 4. 資金源

アゾフのようなネオナチ組織は社会主義崩壊後の東欧各国で多数結成されたが、他国では当局の規制を受けるのに対して、ウクライナでは公然と政府の庇護を受けている。政

37) Colborne [2021].

38) Ibid.

39) Miller [2018].

40) Fedeczko [2018].

41) ヨーロッパに広く居住する少数民族。かつての日本では「ジブシー」と呼んでいた。

42) Qalko [2022.1].

43) Simon Wiesenthal Center [2020].

44) Colborne [2021].

45) Халминен [2022].

46) Μπάκουλη [2022].

府は、様々な極右組織に資金と武器その他の援助をおこなっているが、最大の受益者はアゾフである<sup>47)</sup>。アメリカの「ネイション」の記者は「ウクライナは軍隊の中にネオナチ組織を持つ唯一の国家だ」と2019年に書いている<sup>48)</sup>。しかし、アゾフは政府に財政的に依存しているわけではなく、独自の資金源を持っている。よく知られているのがオリガルヒとの関係だ。例えば、エネルギー関係のオリガルヒでドニプロペトロウシクの前知事のイゴル・コロモイスキはアゾフを含む義勇兵団に早くから資金を提供していた<sup>49)</sup>。コロモイスキは、2019年のゼレンスキーの選挙にも資金を提供しているが、2020年にアメリカ司法省から背任と横領容疑で訴追され、翌年3月にアメリカ国務省の制裁リストに加えられている<sup>50)</sup>。ドネツク州の知事でオリガルヒのセルヒイ・タルタもアゾフに資金を提供している<sup>51)</sup>。

その他の重要な資金源と考えられるのが密輸と恐喝だ。ソ連崩後、ウクライナでは武器の横流し・人身売買・タバコや麻薬の密輸等が横行し、キーウ、オデッサ、ハルキウは国際的な密輸ネットワークの結節点となっている。こうした土壌の上にマフィア組織が暗躍し、それがオリガルヒの権力基盤となっているが、マイダン事件後に状況は一掃悪化した<sup>52)</sup>。マフィアと民兵が結びついたことで、軍や警察が密輸や物資の横流しを取り締まるのが困難になったからだ。2015年7月には「右派セクター」のドミトリー・ヤロシの戦闘部隊がハンガリー国境に近いムカチェヴォでタバコの密輸ルートをめぐるウクライナ軍と警察と銃撃戦を展開する事件も起こっている<sup>53)</sup>。アゾフも犯罪組織と結びついて資金を得ているとの指摘がなされている<sup>54)</sup>。実際、アゾフは軍警察と衝突事件を起こしている<sup>55)</sup>。

## 5. テロ組織認定と西側の支援

アゾフやその同盟者の極右民兵はマイノリティ迫害だけでなく戦争犯罪に関与した疑惑も持たれている。国連人権高等弁務官事務所はアゾフなどの民兵がドンバス地域で民間人の虐殺・強姦・略奪・拷問等に関与していたと報告している<sup>56)</sup>。ヒューマン・ライツ・ウォッチもアゾフが民間人を迫害していると繰り返し警告してきた。これを受けて、2015

47) Roussinos [2022].

48) Golinkin [2019].

49) Халминен [2022].

50) John [2022].

51) Walker [2022].

52) Francesco [2018].

53) Marten [2017].

54) Μπάκουλη [2022].

55) Ткаченко [2015].

56) UNHCHR [2016].



年6月にカナダとアメリカはアゾフをネオナチ組織と断定し、支援しないと表明した<sup>57)</sup>。

しかし、アメリカ政府は2016年にこの措置を解除した。「アルジャジーラ」によると、そこにはペンタゴンの圧力があったという<sup>58)</sup>。これ以後、議会と政府の間でアゾフをテロ組織と認定するかどうかをめぐって駆け引きが繰り返され続けた。2019年10月には、マックス・ローズ議員をリーダーとするアメリカ下院の40人の議員が国務省にアゾフを国際テロ組織と認定するよう求めた<sup>59)</sup>。この要望は受け入れられなかったため、2021年4月に民主党のエリッサ・スロットキン下院議員がバイデン政府に同様の要望書を提出したがテロ組織認定は見送られた<sup>60)</sup>。

アメリカ政府がアゾフのテロ組織認定を渋る理由は、ウクライナへの軍事援助の一環としてこの組織に武器を供与していることに関係しているようだ。アメリカ政府は2014年以降、昨年までにウクライナ政府に25億ドル以上の軍事支援を行った最大のスポンサーであり<sup>61)</sup>、アゾフと米軍関係者が接触している証拠もある。2015年に「ウクラインスカ・プラウダ」はアメリカに戦闘技術を学んだというアゾフの幹部の証言を掲載したし<sup>62)</sup>、米軍がキーウ近郊の国家親衛隊の訓練場でアゾフのメンバーに軍事教練を行う様子を収めたビデオも存在する<sup>63)</sup>。

アメリカに次ぐ10億ドル以上の軍事援助をおこなってきたカナダもアゾフを訓練していた。ウクライナ当局は、カナダが訓練した国家親衛隊員の中にアゾフ・メンバーが含まれていたことを公式に認めているし<sup>64)</sup>、カナダ軍将校たちがアゾフ幹部と会合した写真もリークされている。「オタワ・シチズン」によると、将校たちはアゾフがネオナチ組織であることを認識した上で訓練を行っていたという<sup>65)</sup>。「ラジオ・カナダ」は、アメリカやカナダの支援によりアゾフの装備と戦闘能力は格段に向上し、NATO標準の戦闘能力を持つに至ったと結論している<sup>66)</sup>。

## 6. アゾフの国際ネットワーク

アゾフを支える国際ネットワークはウクライナの軍事支援国だけではない。アゾフは海

---

57) Μπάκουλη [2022].

58) Aljazeera [2022].

59) Українська правда [2019].

60) Goncharenko [2022].

61) Glaeser [2021].

62) Шеремет [2022].

63) Μπάκουλη [2022].

64) Coutu [2022].

65) Pugliese [2022].

66) Coutu [2022].

外の極右思想と人種主義理論の吸収に熱心で、北欧、ドイツ、クロアチア、ポルトガル、イタリアなどの極右組織と盛んに交流している<sup>67)</sup>。キーウの事務所の壁には三島由紀夫やコルネリウ・コドレアヌ（ルーマニアの鉄衛団の指導者）やユリウス・エヴォラ（イタリアの人種主義者）の写真も飾られている<sup>68)</sup>。

ウクライナには世界中の極右活動家が軍事訓練を受けたり、戦争経験を積んだりするためにやってきており、アゾフはその中心にいる。トルコのメディアによると、ロシア侵攻前から22カ国の義勇兵が参加しており、その殆どが白人至上主義者だったと言う<sup>69)</sup>。ニュース専門放送局「MSNBC」はアメリカのネオナチ組織「ベイス」のメンバーが2020年にアゾフに加わってウクライナ東部の戦闘に参加していたと伝えている<sup>70)</sup>。「ドイチェ・ヴェレ」もドイツの極右運動とアゾフが密接につながっているとし<sup>71)</sup>、フランスの極右もウクライナに出かけてアゾフと接触していた<sup>72)</sup>。北欧諸国の極右もアゾフと太いパイプを持っている。スウェーデンのネオナチのミカエル・スクリトは2016年にウクライナで戦い、その後アゾフの軍事教官となった<sup>73)</sup>。フィンランドからも2014年以降、最低3人がアゾフに参加したことが確認されている<sup>74)</sup>。アゾフにはロシアとベラルーシ出身のメンバーも多数在籍している。そもそもアゾフの共通語はロシア語で、中核メンバーのほとんどがロシア語を母語とし、ロシア流の人種主義思想を信奉している。ロシア人のセルゲイ・ボツマン・コロトキフはアゾフの最高幹部の一人だ。ベラルーシのネオナチもマイダン事件直後からアゾフと行動を共にしている<sup>75)</sup>。

## 7. ロシア侵略とアゾフ

ロシアの侵略はアゾフが勢力を拡大するチャンスとなると見られている。マイケル・コルボーンは昨年末のインタビューで「戦争が起これば、アゾフは『祖国の防衛者にして革命の前衛』であると誇示する機会に恵まれるだろう。ウクライナの都市がロシア軍に占領されれば、極右のゲリラが市街戦を展開するかもしれない。アゾフは戦争によって誕生した組織なので戦争を必要としている。戦争は彼らの存在意義であり、目標である。2022

---

67) Colborne [2019].

68) Roussinos [2022].

69) Haberlerim [2022].

70) Miller-Idriss [2022].

71) Goncharenko [2022].

72) Geoffroy [2022].

73) Шеремет [2015].

74) Халминен [2022].

75) Шеремет [2015].

年に戦争が起これば、彼らは嬉しくてたまらないだろう<sup>76)</sup>」と語っていたが、実際の状況はこの予言通りに進んでいる。

プーチンはウクライナの「脱ナチ化」を侵攻の大義に掲げており、アゾフを「ゼレンスキー体制がナチスに支配されている」という主張の根拠に挙げている<sup>77)</sup>。そのためウクライナ政府と西側諸国は、アゾフとネオナチの関係の隠蔽に躍起になっている。ウクライナではアゾフのネオナチ性に言及することはクレムリンのプロパガンダに加担することだとの認識が一般化しているし、西側政府もアゾフを容認し、日本の公安調査庁もアゾフを国際テロ集団リストから外した。欧米の主要メディアはネオナチの影響力を矮小化する報道に努め、「CNN」に至っては、アゾフが民間人を迫害しているとの報道はロシアの流すフェイク・ニュースだと言い切っている<sup>78)</sup>。2016年にアゾフを危険な組織に指定したFacebookも、ロシア侵攻が始まるとこれを解除し、アゾフを称賛する書き込みを容認するようになった<sup>79)</sup>。オタワ大学のドミニク・アレルは、ロシア侵攻後もアゾフは脱政治化しておらず、ネオナチ思想に基づいた戦争目的を遂行し、独自の指揮命令系統を維持し、ウクライナ軍から独立した存在として機能し続けていると警告を発しているが<sup>80)</sup>、「オタワ・シチズン」のデヴィッド・ピュグリーズが指摘するように、「ジャーナリストたちはアゾフを英雄視し、組織内のネオナチは少数だという論法で存在を容認している」ため「アゾフがより広く受け入れられる触媒として作用している」<sup>81)</sup>。

アゾフは、こうした西側メディアのご都合主義に便乗してプロパガンダを活発化させている。「我々はロシアの侵略に対して武器をとった愛国者」であり<sup>82)</sup>、「本当のファシストはロシアの指導部とロシア軍だ」と大見えを切り<sup>83)</sup>、「反ファシズム統一戦線」の論理で新規メンバーを獲得しようとしている。彼らはキーウやマリウポリで市民に軍事訓練を行う様子を公開し<sup>84)</sup>、西側メディアがこれに追随したことで、海外ではウクライナ正規軍の一部であると言う誤解も広がった。

プロパガンダの効果は絶大で、アゾフは急激に肥大化した。アゾフの動員力は2014年

---

76) Colborne [2021].

77) Миркин [2022].

78) John [2022].

79) Aljazeera [2022].

80) Coutu [2022].

81) Pugliese [2022].

82) Philp [2022].

83) Schipani [2022].

84) John [2022].

のマリウポリ攻防戦時には800人ほどだったが<sup>85)</sup>、その年末には2000人を超えた<sup>86)</sup>。2015年から2018年の連隊の兵力は2500人程度で推移していたが<sup>87)</sup>、2021年にロシア侵攻が取り沙汰され始めると人員を拡大し<sup>88)</sup>、キーウとハルキウとドニプロでは新規の大隊が作られ、特殊部隊の新設や地方都市の民兵団結成が相次いだ<sup>89)</sup>。

ロシア侵攻によりウクライナ政府が入国制限を撤廃したことで、多くの外国人戦闘員もアゾフに加わった。英国外相リズ・トラスは英国人にウクライナに義勇兵として渡航することを奨励したし、ドイツ内務省の声明によると、3月初頭の段階で既に少なくとも10人のドイツ人がアゾフに参加したという<sup>90)</sup>。クロアチアではザグレブのプロサッカーチームFCディナモの元応援団長でアゾフの戦闘に参加した経験を持つ極右活動家のデニス・セレルがネットで義勇兵を集め、アゾフ傘下のクロアチア人大隊の結成を進めたし<sup>91)</sup>、ベラルーシ人極右が結成した300名ほどの独立大隊もアゾフに編入された<sup>92)</sup>。

こうした一連の増強によりアゾフの動員兵力は飛躍的に拡大し、ビレツキーによると既に4月初頭時点で1万人を超えたという。内訳はキーウ、ハルキウ、ドニプロに各1000人、マリウポリに3000人、他の都市でも小規模な部隊が多数結成された<sup>93)</sup>。アゾフにはアメリカやイスラエルから供与された先端兵器が優先的に配備されており<sup>94)</sup>、英国製の対戦車ランチャーの講習を受ける様子もリークされた<sup>95)</sup>。

ロシアの侵攻に対し、アゾフの部隊はマリウポリの他、キーウやハルキウの攻防戦にも投入され、主にゲリラ戦で活躍した。アゾフに対する国際的評価は鰻登りで、「ワシントン・ポスト」は「ウクライナ軍内で最も戦闘に習熟した精鋭部隊」と持ち上げ<sup>96)</sup>、「フィナンシャル・タイムズ」はウクライナ側の軍事力の主流になりつつあると分析した<sup>97)</sup>。4月13日にはウクライナ軍のアゾフ化を象徴する出来事も起こった。この日、ロシアはマリウポリ防衛の任についていたウクライナ軍の第36海兵旅団が大量投降したと発表した<sup>98)</sup>。こ

---

85) Coutu [2022].

86) Μπάκουλη[2022].

87) Haberlerim [2022].

88) France 24 [2022].

89) Roussinos [2022].

90) Qalko [2022.2].

91) Grgurinovic [2022].

92) Ciobanu [2022].

93) Raghavan [2022].

94) Εφημερίδα των Συντακτών [2022].

95) Roussinos [2022].

96) Raghavan [2022].

97) Schipani [2022].

98) Креуыл [2022].

れに対し、ウクライナ側は、一部の兵が「脱走」したことは認めたものの、36旅団は存続していると反論したが、同時に同日付で36旅団が改組してアゾフに合流すると発表した<sup>99)</sup>。つまり、ウクライナ政府は正規軍がパラミリタリーの指揮下に入ることを公式に容認したのである。これは前代未聞の出来事と言えるだろう。この出来事の持つ意味は大きい。4月半ばにはゼレンスキー大統領がマリウポリのアゾフを「我々の兵士、我々の若者」と呼び、彼らが殲滅されれば「和平交渉は終わる」と語り、ウクライナ政府はアゾフと心中する覚悟であるかのように振る舞い始めた<sup>100)</sup>。

## 8. 人道回廊の封鎖疑惑

ロシア政府はアゾフが戦争に乗じて組織的に市民に対する人権侵害をおこなっていたと主張している。ロシア寄りのニュース・サイト [southfront.com](http://southfront.com) には、アゾフが民間人を殺害し、病院を攻撃したり、意図的に橋を破壊したりして避難を妨害しているという住民の証言を収録したアメリカ人記者パトリック・ランカスターの取材映像もアップされている<sup>101)</sup>。これに対し在ギリシャ・ウクライナ大使は、アゾフは市民を守っており、彼らが民間人を虐待し軍律に従わずに独立して行動するパラミリタリーだという報道はロシアのプロパガンダだと反論したが<sup>102)</sup>、アゾフによる市民虐殺のニュースを一概に「フェイク」だと切り捨てることはできない。

疑惑が晴れない理由の一つは、前述のようにアゾフが以前から市民の虐殺事件を起こしてきたことだ。ロシア侵攻の少し前にも、ギリシャの新聞各紙はドンバス地方のギリシャ人の村グラニトノエで「ウクライナ人の兵士」に住民が虐殺される事件が起こったと報じている。「エスノス」紙によると、事件の経緯は以下のものであった。ギリシャ人たちがいる居酒屋に数人の「ウクライナ人の兵士」たちが入ってきて、酔っ払った挙句、客たちと口論になり、「ウクライナを嫌悪する分離主義者どもめ」と罵倒しながら自動小銃を乱射し二人を殺害、数人を負傷させた。ギリシャ政府も事態を憂慮し、ウクライナに正式に抗議し、ギリシャ系住民の安全確保を求めた<sup>103)</sup>。グラニトノエは2014年に住民投票で「ドネツク人民共和国」への帰属を決議した村だが、ウクライナ側に奪還されていた。ウクラ

---

99) Мазуренко [2022.3].

100) Мусаева [2022].

101) ランカスターが撮影したアゾフに虐殺されたとする腹部に鉤十字の切れ込みを入れられた女性の遺体の映像は、その後、ウクライナ国営放送によって「ロシア軍撤退後にキエフ近郊で発見された遺体」と言う触れ込みで再利用された。Blumenthal [2022].

102) Pontosnews [2022].

103) Έθνος [2022.1].

イナの少数民族は殆どがロシア語話者であるため、マイダン事件後のキーウの民族主義政策に不安を感じている。ギリシャ人はマリウポリ周辺に10万人以上が暮らしているが、彼らの多くが極右民族主義者に不信を抱いている。そのためアゾフはギリシャ人を潜在的な「親露派」と見做し、迫害を続けてきた<sup>104)</sup>。グラニトノエの事件はこうした背景から起こったと考えられる。

ところで、ウクライナ戦争では都市が戦場となっているため、民間人をどうやって避難させるかが一つの焦点となった。両国政府は停戦交渉の一環として、包囲下にある都市から住民が避難できる人道回廊の開設で幾度も合意しているが、芳しい成果を上げていない。マリウポリでも3月初旬に人道回廊の設置が合意されたが、一部の市民しか脱出できなかった。ウクライナ側は「ロシア軍の行動によって人道回廊設置の試みが失敗した」と主張したが、ロシアの国連大使はアゾフが避難路を封鎖し市民を「人間の盾」として使っていると反論した<sup>105)</sup>。ウクライナとロシアがメディア上でも戦争していることを象徴するような論争だが、ウクライナの民兵が避難民を虐殺した事件は実際に起こっている。「タイムズ・オブ・イスラエル」によると、キーウから避難しようとしたウクライナ出身のイスラエル市民が2月28日に検問所で民兵に拉致され、「チェチェン人」だとして射殺されたという<sup>106)</sup>。

マリウポリ近郊を取材したギリシャのジャーナリストたちも、アゾフのメンバーが市民を迫害しているという情報を複数確認している。ロシア軍が原発施設に迫る中、マリウポリからザポロージャまで現地取材を敢行した特派員たちは、アゾフの戦闘員がマリウポリから脱出しようとする市民たちを抑留し、引き返させている光景を何度も目撃している<sup>107)</sup>。「スカイ・テレビ」がインタビューしたマリウポリからの脱出に成功したギリシャ系の女性「フィリツァ」は、途中で武器を持ったアゾフの戦闘員に妨害され、脅迫されたと証言しているし、マリウポリ市内に残ったギリシャ人「キウラナ」は、「外に出ればアゾフ連隊に銃撃されてしまう。奴らはファシストで、逃げようとする人々を殺そうとしているので避難できない」と語っていた<sup>108)</sup>。「オープン・テレビ」も、アゾフが集合住宅に爆薬を仕掛け、ロシア軍が通過する際に住民ともども建物を爆破しているという証言を伝えていた<sup>109)</sup>。ギリシャ政府はアゾフを公式には非難していないが、マリウポリのギリシャ

---

104) Σαδανά [2022].

105) Έθνος [2022.2].

106) Gross [2022].

107) Ριζοσπάστης [2022].

108) Ολυμπία [2022].

109) 902gr [2022].

総領事館のホームページは避難希望者に対して「我々の脱出を妨害しようとする様々なグループが存在している」と警告し、婉曲的にアゾフが避難を妨害していることを認めていた<sup>110)</sup>。

アゾフが民間人の避難を妨害し、不当に抑留していたことは4月に解放されたブルガリア船籍のツアレヴナ号の乗組員の証言からも確認できる。ツアレヴナ号は2月21日にマリウポリに寄港し、25日に出港する予定だったが、戦争が始まったため抑留された。船の甲板にはアゾフが迫撃砲や擲弾発射器を設置したので、ロシア軍の標的となる可能性があったが、船員たちは50日間も船内にとどめ置かれた。船員たちはブルガリアの家族に、アゾフによって人間の盾として利用されていると伝えていた<sup>111)</sup>。船員たちはロシア軍がマリウポリ港を制圧した後に無事帰国できたが、「ストヤン」という船員はそれまで避難できなかった理由を次のように語っている。「ブルガリア政府はウクライナ支配地域を通して避難するよう求めたが、ウクライナ側は、携帯電話とパソコンを置いてゆき、荷物も携行してはならず、生命の安全は保証しないので自己責任で避難する旨の誓約書に署名せよと要求したので避難できなかった」<sup>112)</sup>。つまり、殺されても文句を言うなというメッセージである。

同様の事例は、オデーサでも報告されている。トルコの貨物船ラフミ・ヤージュ号は2月22日にオデーサ近郊の Cholno Morluk 港に寄港したが24日に戦争が始まったため出航できなくなり、船員たちは船内に抑留された<sup>113)</sup>。それだけでなく、スイス資本の埠頭管理会社フェルマン・トレーディングが積荷を強奪しようとして民兵を差し向ける事件も起こった。民兵は船員たちに暴行し、積荷を持ち去ろうとしたが、頑強な抵抗にあって引き下がったのだが、船主がオデーサ軍政知事のマクシム・マルチェンコに抗議したにも拘らず、民兵は処罰されず、船に護衛が付けられることもなかった。この事件に関与した「民兵」がどのようなグループなのかは明らかになっていないが、フェルマン・トレーディングは前述のイゴル・コロモイスキの資金洗浄に関与した疑惑がもたれている<sup>114)</sup>。コロモイスキは2014年の内戦時にアゾフ以外にも民兵を援助しており、その中にはアイダールという組織も含まれていた。アイダールは2015年に解散しているが、その司令官だったのがマクシム・マルチェンコである。マルチェンコには戦犯容疑がかけられているにも拘ら

110) Ριζοπάστης [2022].

111) Труд [2022].

112) Новините [2022].

113) Demir [2022].

114) Odatv [2022.2].

ず、ゼレンスキー大統領は彼をオデーサ州の軍政知事に任命した<sup>115)</sup>。

アゾフが情報操作を行っていたという疑惑は、彼らが化学兵器の攻撃を受けたと主張したことで一層深まった。4月12日にビレツキーは、ロシア軍がマリウポリで化学兵器を使用し、3人が化学物質中毒のはっきりした症状を示していると発表した<sup>116)</sup>。このニュースはすぐに世界中で報じられたが、ウクライナ政府は事実かどうかの明言を避け、アメリカとイギリスの諜報機関も事実と認めていない<sup>117)</sup>。事実確認はうやむやにされ、アゾフもこの件に言及しなくなったのを見ると偽旗作戦だった可能性が高い。

アゾフが市民の避難を妨害した疑惑は深まるばかりだが、彼らの目的は何だったのだろうか。ロシア軍との戦力差を考えると、アゾフやウクライナ軍には正攻法では勝ち目は無い。圧倒的な戦力を誇る敵と戦う際に有効なのはゲリラ戦術だが、都市を拠点にゲリラ戦を展開するには盾となる市民の存在が必要だ。これはカルロス・マリゲーラが「都市ゲリラ教程」で語っている古典的な戦術であり、シリア内戦でもイスラム主義者がアレッポ攻防戦で用いていた。マリウポリでも同様の事態が進行したのではないかと。アゾフは、「ロシア軍が20万人の市民をマリウポリに閉じ込めてジェノサイドを企んでいる<sup>118)</sup>」との論法で市民を人質にした都市ゲリラ戦術を正当化し、戦闘を長期化させることで、ロシア軍の消耗を狙ったと考えるのが妥当だろう。

## 9. 結びに代えて

これまで論じてきたことを整理してみよう。アゾフは、ウクライナ軍から独立して行動する特殊部隊であるが、同時に、ネオナチ思想を信奉する政党と社会団体を持つ政治運動でもあり、オリガルヒや犯罪組織を資金源にする反社会団体で、市民を迫害していることも確認された。これはアゾフが典型的なパラミリタリーであることを示している。

次に、パラミリタリーと現代の戦争という文脈でウクライナ戦争を考えるという本論のテーマに即して、アゾフをユーゴ内戦やシリア内戦で登場したパラミリタリーと比較してみよう。まず、両者の間には次のような共通の行動パターンが見られる。犯罪歴のあるアンチヒーロー的指導者の下でフリーガンの若者を母体に誕生したことは、ボスニア内戦で暗躍した「アルカンの虎」や「ユースフ・プラジナ部隊」などに酷似している。右翼政治家やオリガルヒなどの支配層の庇護をうけて組織を拡大したという特徴もボスニアで見ら

---

115) Миркин [2022].

116) Мазуренко [2022.2].

117) Boutilier [2022].

118) Мазуренко [2022.1].



れたものである。西側メディアを味方につけ、市民を人間の盾として利用する戦術は、コソボ解放軍やシリア内戦の「ホワイト・ヘルメット」を彷彿とさせる。恐喝や密輸や物資の横流しを資金源にしているという疑惑は、ボスニア内戦で報告される「ウォーロード」たちやIS（「イスラム国」）に代表されるシリア内戦のイスラム主義者組織の行動パターンに酷似している。他方、アゾフにはこうした組織にはない特徴もある。戦場におけるパラミリタリーの役割は後方攪乱や民族浄化が主で、敵の主力部隊と通常戦を展開することは稀だが、アゾフはマリウポリなどの戦線でウクライナ正規軍に代わる対露戦の主力となった。もう一つの特徴は政治運動としての持続性だ。パラミリタリーが政治運動化することは珍しくないが、「アルカンの虎」は政党化した直ぐに消滅したし、ヴォイスラフ・シェシェリの「チェトニク」はセルビア急進党として存続したが軍事部門は解体されたように、従来のパラミリタリー政治運動は長続きできなかった。アゾフのように軍事部門と政治部門を備えたまま存続し、かつ政府の保護を受ける例は他にはあまり見られない。比較可能と思われるのはレバノンのヒズボラ、および、第一次ヒトラー内閣期のドイツ政府とナチス親衛隊の関係であろうか。この時、親衛隊は補助警察に編入されたのだが、その後も国防軍に属さない独立した軍隊としてヒトラー独裁体制の柱となった。開戦によってアゾフは軍事部門を拡大し、戦況が激化するにつれてウクライナ政府はアゾフの軍事力への依存を強めたが、彼らの政治力が強まれば、どのような事態になるのかが懸念される。

この事態を招いた最大の責任はロシアのプーチン政権にあり、「脱ナチ化」と称して始めた戦争は、ウクライナのネオナチの立場を強化してしまった。一方、西側諸国もロシアの「権威主義」に対抗して「ウクライナの民主主義」を守るとの論理でアゾフを支援したが、これは「独裁体制の民主化」と称してイスラム主義者を支援し、ISやアルカイダの台頭を許したシリア内戦と同じ過ちを犯すことになりそうだ。アゾフの勢力拡大を防ぎ、ウクライナのパラミリタリー化を止めることが求められる。

参考文献

- Aljazeera [2022] “Who are Ukraine’ s far-right Azov regiment?” *aljazeera.com*, 1 Mar.
- Blumenthal, Max & Esha Krishnaswamy [2022] “One less traitor” : Zelensky oversees campaign of assassination, kidnapping and torture of political opposition,” *The Grayzone*, April 17.
- Boutilier, Alex [2022] “Who is Ukraine’s Azov Battalion, the ‘ultra-nationalist’ group claiming chemical weapon attacks?” *globalnews.ca*, April 13.
- Buscemi, Francesco et al. [2018] “Illicit firearms proliferation in the EU periphery: The case of Ukraine.” In: N. Duquet & K. Goris, eds., *Triggering Terror: Illicit Gun Markets and Firearms Acquisition of Terrorist Networks in Europe*, Brussels: Flemish Peace Institute.
- Ciobanu, Claudia [2022], “Foreign fighters: Taking the fight to Russia in Ukraine,” *BIRN*, 22 March.
- Colborne, Michael [2019] “Croatia key to Ukrainian far-right’ s international ambitions,” *BIRN*, 18 July.
- Colborne, Michael [2021] “Azov needs a war.” An interview with Michael Colborne,” *violence-marker.org.ua*, 29 December.
- Coutu, Simon [2022] “Le Canada a formé des éléments d’ un régiment ukrainien lié à l’ extrême droite,” *ici.radio-canada.ca*, 11 Apr.
- Demir, Sinem Nazlı [2022] “Odessa’ daki esaret 50. gününde! Türk denizciler kurtarılmayı bekliyor,” *Cumhuriyet*, 12 Apr.
- Dorell, Oren [2015] “Volunteer Ukrainian unit includes Nazis,” *USA Today*, 10 Mar.
- Fedeczko, Sofia & Matthew Kupfer [2018] “What’ s behind Ukraine’ s shocking “National Druzhyna” militia?” *hromadske.ua*, 4 Feb.
- France 24 [2022] “Azov regiment takes centre stage in Ukraine propaganda war,” *france24.com*, 25 Mar.
- Geoffroy, Romain [2022] “Qui sont les soldats du régiment Azov, accusés d’ être les « néonazis » de l’ armée ukrainienne,” *Le Monde*, 23 Mar.
- Glaeser, Sascha [2021] “The futility of U.S. military aid and NATO aspirations for Ukraine,” *Defense Priorities*, 15 Nov.
- Golinkin, Lev [2019] “Neo-Nazis and the Far Right are on the march in Ukraine,” *The Nation*, 22 Feb.
- Goncharenko, Roman [2022] “The Azov Battalion: Extremists defending Mariupol,” *dw.com*, 16 Mar.
- Grgurinovic, Matea [2022] “Russia summons Croatian attaché over reports of ‘mercenaries’ in Ukraine,” *BIRN*, 4 Mar.
- Gross, Judah Ari [2022] “Israeli man shot dead as convoy escaping Kyiv comes under mistaken Ukrainian fire,” *The Times of Israel*, 28 Feb.
- Haberlerim İnternet Gazetesi [2022] “Azak taburu nedir, kimlerden oluşuyor? Ukraynalı Neo-Naziler kimdir?” *haberlerim.com.tr*, 6 Mar.
- John, Tara & Tim Lister [2022] “A far-right battalion has a key role in Ukraine’ s resistance,” *CNN*, 30 Mar.
- Marten, Kimberly & Olga Oliker [2017] “Ukraine’ s volunteer militias may have saved the country, but now they threaten it,” *warontherocks.com*, 14 Sep.
- Miller, Christopher [2018] “Far-Right vigilantes destroy another Romany camp in Kyiv,” *Radio Free Europe*, 8 June.
- Miller-Idriss, Cynthia [2022] “Fighting Russia in Ukraine sadly appeals to racist, far-right extremists,” *msnbc.com*, 7

Mar.

Odatv [2022] “Ukraynalı milisler Türk gemisini bastı. Bayrakla direndiler,” *Odatv.tr*, 24 Mar.

Petik, Oles & Denys Gorbach [2016] “The rise of Azov,” *opendemocracy.net*, 15 Feb.

Philp, Catherine [2022] “Azov Battalion: ‘We are patriots – we’ re fighting the real Nazis of the 21st century’ ,” *The Times*, 30 Mar.

Pontosnews [2022] “Ουκρανός πρέσβης στην Ελλάδα: Το Τάγμα Αζόφ υπερασπίζεται τον άμαχο πληθυσμό της Ουκρανίας,” *pontosnews.gr* 7 Apr.

Pugliese, David [2022] “Canada failed when it trained Ukrainian troops linked to the far right, says Nazi hunter,” *Ottawa Citizen*, 13 Apr.

Qalko [2022.1] “Azok Ukrayna’ da önce Neo Nazi şimdi Ülkenin resmi taburu, Ne iş bu?” *Qalko.com*, 6 Mar.

Qalko [2022.2] “Yüzlerce Yabancı Avrupa’ dan, Ukrayna savaşında Azok’ a katılıyor,” *Qalko.com*, 7 Mar.

Raghavan, Sudarsan et al. [2022] “Right-wing Azov Battalion emerges as a controversial defender of Ukraine,” *Washington Post*, 6 Apr.

Roussinos, Aris [2022] “The truth about Ukraine’ s Far-Right militias,” *unherd.com*, 15 Mar.

Schipani, Andres & Roman Olearchyk [2022] “‘Don’ t confuse patriotism and Nazism’ : Ukraine’ s Azov forces face scrutiny,” *Financial Times*, 30 Mar.

Simon Wiesenthal Center [2020] *Telegram: A briefing*, July 2020.

Sommerlad, Joe [2022] “Who are Ukraine’ s neo-Nazi Azov Battalion?” *Independent*, 24 Mar.

UNHCHR [2016] *Report on the human rights situation in Ukraine 16 August to 15 November 2016*, UN.

Üngör, Üğür Ümit, [2020] *Paramilitarism: Mass Violence in the Shadow of the State*, Oxford: Oxford U.P.

Walker, Shaun [2014] “Azov fighters are Ukraine’ s greatest weapon and may be its greatest threat,” *The Guardian*, 10 Sep.

Zúquete, José Pedro [2018] *The Identitarians: The Movement against Globalism and Islam in Europe*, Notre Dame, Indiana, University of Notre Dame Press.

佐原徹哉 [2020] 「アメリカ合衆国のシナゴーク襲撃事件とオルタ右翼の『代替』理論」, 『いすみあ』 明治大学教養デザイン研究科紀要 11.

Έθνος [2022.1] “Ουκρανία - Ρωσόφωνοι του Ντονιέτσκ: Υπήρχαν πολιτικά κίνητρα στη δολοφονία των δύο Ελλήνων,” *Έθνος*, 14 Feb.

Έθνος [2022.1] “Πόλεμος Ουκρανία - Τάγμα Αζόφ: Οι νεοναζιστικές διασυνδέσεις και οι απαρχές της μονάδας,” *Έθνος*, 30 Mar.

Εφημερίδα των Συντακτών [2022] “Ισραηλινό όπλο χρησιμοποιήθηκε από το τάγμα Αζόφ εναντίον των Ρώσων,” *efsyn.gr*, 20 Apr.

Μπάκουλη, Νίκη [2022] “Πόσο ναζιστικό είναι το Τάγμα Αζόφ;” *news247.gr* 9 Apr.

Ολυμπία [2022] “Ελληνοπούλα της Μαριούπολης: “Ουκρανοί στρατιώτες μας απειλούσαν – Οι Ρώσοι μας ηρεμούσαν,” *olympia.gr*, 17 Mar.

Ριζοσπάστης [2022] “Δεν απαντάει για τις φασιστικές ομάδες,” *Ριζοσπάστης*, 3 Mar.

Σαδανά, Γεωργία [2022] “Η παραγμένη ιστορία του Σαρτανά: Οι διωγμοί, οι πόλεμοι και η δίψα για ελληνική παιδεία,” *protothema.gr*, 1 Mar.

- 902gr [2022] “Τι κάνει το φασιστικό τάγμα Αζοφ στη Μαριούπολη;” *902gr*, 1 Mar.
- Білецький, Андрій [n.d.] *Слово білого вождя*, [n.p.] Патріот України.
- Карловский, Денис [2022] “Мариуполь: в новом обращении “Азов” поддержал действия военного руководства,” *pravda.com.ua*, 11 Apr.
- Крецул, Роман, et al. [2022] “Лучше поздно: почему в Мариуполе произошла массовая сдача в плен,” *Известия*, 14 Apr.
- Мазуренко, Алена [2022.1] “Кадры из Ирпеня и Бучи ужасают, но вы еще не видели Мариуполя – “Азов”, *pravda.com.ua*, 3 Apr.
- Мазуренко, Алена [2022.2] “Химатаку совершили на “Азовсталь”, есть пострадавшие “азовцы” – Белецкий” *pravda.com.ua*, 12 Apr.
- Мазуренко, Алена [2022.3] “Лидеры “Азова” и 36-й ОБрМП записали совместное видео после объединения в Мариуполе,” *pravda.com.ua*, 13 Apr.
- Миркин, Сергей [2022] “Почему Украине нужна денацификация,” *Взгляд*, 3 Mar.
- Мусаева, Севгиль & Роман Петренко [2022] “Уничтожение защитников Мариуполя может поставить точку в переговорах – Зеленский”, *pravda.com.ua*, 16 Apr.
- Новините [2022] “Моряци от кораба “Царевна” със шокиращ разказ за ужаса в Мариупол,” *novinite.bg*, 19 Apr.
- Петренко, Роман [2022] “Полк “Азов” обратился к россиянам и пожелал свергнуть Путина” *pravda.com.ua*, 28 Mar.
- Стара, Аліна, [2022] “Полк ‘Азов’ та російські фейки,” *pravda.com.ua*, 7 Mar.
- Ткаченко, Анна [2015] “Схватка между бойцами “Азова” и военной прокуратурой произошла в Мариуполе,” *УНН*, 26 Aug.
- Труд [2022] “Азов похитили кораба ни Царевна,” *Труд*, 10 Apr.
- Українська правда [2019] “Министр о попытке конгрессменов США назвать “Азов” террористами: “Дикость”, *pravda.com.ua*, 31 Oct.
- Халминен, Лаура [2022] “Полк “Азов” обладает сомнительной репутацией, связанной с неонацизмом – Россия использует это в своей пропаганде по “очищению” Украины от нацистов,” *Helsingin Sanomat*, 28 Mar.
- Шеремет, Павел & Дмитрий Ларин [2015] “Полк “Азов”. Между старой и новой армией,” *pravda.com.ua*, 16 Apr.